

蜜柑とユウウツ

—茨木のり子異聞—



言わせて! 今日の芝居

◎五十字劇評 No.32

舞台はわかりやすかったです。松金さんがかわいらしかったのです。

【五〇代】

▼人として感情をストレートに表すことは有りでも、作り手としては×。長田育恵さんの矜持が伝わってききました。

(女性)

▼「気掛かり」かわいいのり子。安信さんが亡くなってもずつと一緒に青春してた。レインコート届けられたかな。

(女性)

【六〇代】

▼声高ではないが、いくつものメッセージが心をふるわせた。「たとえ子供でも考えることができたはずなのに、ちゃんと見ようとも、知ろうともしなかった」。では今生きている大人は？思考停止に陥っている社会に埋没してはいないだろうか。「わたしが一番きれいだっ

とき」の時代に戻されようとしている今。何をなすべきなのかが問われている。歴史の歯車を逆戻りさせないために。

(男性)

▼同じ時代に同じ性を生き死んだ三人の「のりこ」。戦争責任に向き合う孤高の詩に幸福な家庭生活があり、安堵。

▼いろんな「のり子」さんを見て楽しかった。けど蜜柑の精にはびっくり。最後までわかりませんでした。

▼「倚りかからず」私は時おりこの詩のフレーズを自分に向かつて声かけしています。人生を見つめさせてくれる芝居でした。

(女性)

▼舞台の中の詩の「倚りかからず」がとても力強く感じる事ができた。

(女性)

人ののり子の言葉の掛け合い及び他のキャストとのアンサンブルが見事で、充実した今年最後の演劇を楽しめました。

(男性)

▼題名通り、何かすつきりしないユウウツなお芝居を観た気がする。茨木のり子さんの気掛かりはなんだったのか、亡き夫の骨・最後の原稿・蜜柑の木。感想会に行つて納得する話を聞こうと思う。

(女性)





【六〇代】

▼三人ののり子の登場に最初は戸惑いながらも、最初から最後まで次はどんな展開になるのだろうか、ワクワクしながら観た。この「ワクワク感」が半端ではなく、少なくともここ数年の例会の中では一番のものだった。三人ののり子を登場させ、のり子の「気がかり」を思い出すために、芝居をする中で茨木のり子の生涯を描き、過去と現在時空を

自在に行き来させ、この世とあの世を同居させるという発想は作者長田育恵さん独特のものだと思います。「凄いな〜」と思います。そして、七名の出演者のみなさんの演技も凄いです！自然体でそれぞれの思いがしっかりと伝わってきました。茨木のり子が「大切にしていたもの」が何だったのか、そして彼女自身が生きた時代を彼女がどのように見つけていたのかが鮮明に伝わってきました。また、台詞の中に「大切なことば」がたくさん散りばめられていたと思います。観終わってからもずっとと余韻が残る舞台でした。良かった。

(男性)

【七〇代】

▼期待した通りの芝居で嬉しかったです。

▼「自分の感受性くらい 自

分で守れ ばかものよ」鮮烈な言葉に魅かれながら、新憲法の下女性の像を探ってきました。詩を通して生き方を見つめさせてくれた茨木のり子を三人が見事に演じ楽しませてくれた舞台!!グループ・ぼるに熱い拍手です。

(女性)

▼一年間ずーとこの公演を待っていました。待ちくたびれたのか前半ちよつとねむくなつて。後半「やつぱり ぼる・ぼる」だったけど。最後みかんの木はね。

(女性)

▼大好きな茨木のり子さんの作品をとっても楽しみにしていた。演技者も芯をついていて、今の時代を改めて思った。

(女性)

▼きいこと一緒に泣きたい気持ち。個人の人格の承認が不確かな社会は、自己検閲・相互検閲・忖度と迷走

する。批判って何？ (女性)

【年代性別不明】

▼今回のお芝居はなかなかの芝居だと思いました。人生というものを考えさせられました。人生とはいろいろな考えがあり、いろいろな生活があるものと、つくづく考えさせられそして楽しかったです。わたしも良かったと思えるような人生を送りたいと思います。

▼初めよくわからず観ていましたが、だんだんのり子さんの御主人に対する強い思いなどが表わされていて感激です。

▼短い言葉のなんと深いものか！しみじみと感じることができました。人間関係のうらやましさと自分を考えるお芝居でした。

▼詩人というより一組の夫婦の物語。とても暖かい気持ちになれました。